



## 竹島

### 祈りのかたち

医者のない昔は、疫病で島民の多くが死亡したという。頼る術は、まじないや薬草、祈祷のみ。そのためか、三島村には先人の疫病退散の願いが様々なかたちで残されており、思いを今に伝える。

竹島では疱瘡(ほうそう)よけの石碑**C**や馬方踊り、祠に石を捧げる風習に病除け祈願のかたちが見られる。祠の風習は絶えたが、祠**A**と中の石**B**は今も確認できる。石は海で拾って神に捧げる。

馬方踊りは疱瘡除けを願って始まった。竹島に残る記録では、江戸中期の一七二八(享保十三三年)に疱瘡が流行し、島民の1/4となる三十六名が死亡。一七九〇(一七九三(寛政二)五)年の流行では三十九名が死亡した。生き延びた女性達は、寛政六年に馬方踊り**D**をはじめた。

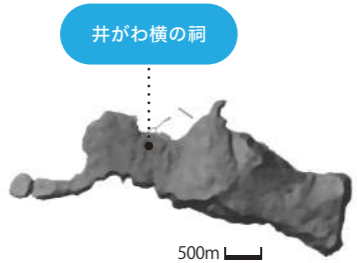
疱瘡は天然痘の古い名で、予防策は十八世紀末のワクチン発明までなかった。強い感染力で紀元前から多くの人が亡くなっている。三島各島では、疫病がはやると病人を家に置いて、残りは山に逃げた。また、来島者は集落へ入る前に一旦隔離した。竹島ではオンボ崎に二週間隔離したという。

十九世紀以降に疱瘡は治まり、赤痢・コレラ・腸チフスが流行した。竹島では赤痢にはお灸をし、腸チフスには薬草やミミズを煎じて飲んでいる。この療法は全島同様で、昭和二十四年、硫黄島に診療所ができるまで続いたという**E**。(三月を参照)

### 思い出話

「昔の疫病の話を一歩踏み込んで想像できるのは、コロナの経験によると思うことがあります。」

竹島地区三〇代男性



# 2

2017年

2022年

年代不明

1960年代

A

B

C

D

E